

現代ギリシア語に於ける 関係詞 $\pi\omicron\upsilon$ の用法について

—— コイネーギリシア語と対照して ——

高橋 りえこ

現代ギリシア語の関係詞には、曲用しない不変化詞 $\pi\omicron\upsilon$ と、曲用する $\delta\ \delta\omicron\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$ がある。従来の記述によると、民衆語に於いては $\pi\omicron\upsilon$ の使用が一般的であるが曖昧さを避ける場合、換言すれば関係詞の格を明示する必要が生じる時、 $\delta\ \delta\omicron\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$ が用いられる。

本研究は、新約聖書を現代語訳する際に、この二つの関係代名詞が原典の如何なる形式と対応して用いられているか、また関係詞の使用分布から $\pi\omicron\upsilon$ が如何なる機能を持つ関係詞であるかを中心に、資料を用いて調査・分析し考察を加えたものである。使用テキスト（新約聖書の中の、マルコ伝・ルカ伝及び使徒行伝）を分析した結果は次のように整理される。

1. 両関係詞の対応状況

$\pi\omicron\upsilon$ 節は分詞句及び冠詞句に対応する傾向があるのに対して、 $\delta\ \delta\omicron\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$ 節は $\pi\omicron\upsilon$ 節とほぼ同様の使用率で関係節への対応を示している。

2. 関係節（ $\delta\varsigma$ 節）との対応

コイネーギリシア語期に於いて、先行詞を持たず節内の定形動詞が接続法である $\delta\varsigma$ 節は、しばしば《indefinite》な関係節を形成する。 $\pi\omicron\upsilon$ 節・ $\delta\ \delta\omicron\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$ 節共にほぼ等しい対応率を示しているが、先行詞を持たない $\delta\varsigma$ 節には、 $\pi\omicron\upsilon$ 節の対応傾向が認められる。特に《indefinite》と解釈される節内定形動詞が接続法である $\delta\varsigma$ 節は、「 $\epsilon\kappa\epsilon\iota\upsilon\omicron\varsigma + \pi\omicron\upsilon$ 節」という形式で訳出されている。

3. 分詞句との対応

分詞が実詞化される Substantival Participle 及び実詞に対置されそれを修飾する Attributive Participle に対して、 $\pi\omicron\upsilon$ 節が使用される傾向が認められた。これに対して、 $\delta\ \delta\omicron\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$ 節は、動詞の付帯的狀況を表す Adverbial Participle を訳出する際に用いられていた。Substantival Participle の中で「 $\pi\acute{\alpha}\varsigma +$ （冠詞）＋分詞」《～する人は誰でも・～するものは何でも》という形式に対しては、 $\pi\omicron\upsilon$ 節が先行詞に不定代名詞をとることが分かった。

上記の対応結果から、新約聖書を現代語訳する際に $\pi\omicron\upsilon$ は《generic・indefinite》と解釈される関係節を形成する関係詞として使用されていることが指摘された。